

人生を拓く

⑨

渡辺 わたなべ

高助さん (83) こうすけ
敦子さん (83) あつこ

〓 西町2丁目

高助さんは東京生まれ。学校の教員だった父親の転勤で生後3カ月で富良野・麓郷地区へ。以来、小学校は南士別、中学校は旭川、高校時代は名寄で過ごしました。

卒業後、日本国有鉄道（現JR北海道）に。国鉄専門学校（当時）に入學し、最先端の新幹線鉄道関連技術を学びました。

新幹線技術は、当時はまだ開発途上。「三島工区で振動試験、動揺試験を重ねていた時、ソ連の鉄道技術団が視察に来てね。時速200キロを超えたら、踊り出して『ハラショー、ハラショー』と大騒ぎしていたよ」と懐かしく思い返されます。

29歳の時、測量技術能力をかわれて国鉄技術開発部門の関連会社に向向。保線技術の開発担当から一転、開業に間に合わせるために開発を急いでいたアメリカからの水中橋脚建設技術導入、まくら木防腐処理、コンクリートまくら木の開発などと多忙な連続だっ



たそうです。

そんなころ、鹿児島生まれの敦子さんと高助さんとの偶然の出会いがー。

敦子さんは当時、国鉄職員などに洋服の出張販売をしていました。出張に来ていた高助さんが国鉄上野駅の近くで「このあたりにどこか食事できるところはありませんか？」と道を尋ね……。二人が35歳の結婚でした。

高助さんが41歳の時、多忙を極めた職場から転勤を決意、青春の思い出深い旭川へ。その後民間会社に転職しました。

民間に移ってからは「輸入木材の乾燥機械の開発、大型機械とか設計なら何でもやったよ」。レストラン店舗、マンション設計も手掛けたそうです。

敦子さんは各地を転動してきた夫を「まじめ一方の人だから」と支え続けてきました。高助さんは「この人は度胸が据わってるよ。いざとなったら頼もしい」といつも頼りにしてきま

した。

鹿児島育ちの敦子さんにとって冬の寒さはいまだ慣れないようですが、穏やかな暮らしをこの地に求め、7年目の冬を迎えています。

俳句

とびつきりの笑顔弾けて冬晴るる
地吹雪の巻舌逃れ家二軒
冬日和昔の友はもういない
新年を床の間飾る羽子板で
冬晴れを電話の声が伝え来る
初日の出鉄腕アトムゆつくりと
冬晴れや木つつきとんとん戸を叩く
コンビニまで歩きましたようか冬うらら
耳をたて背伸びしてみた雪うさぎ
冬うらら一直線の狐みち
牡蠣届く知らせを聞いて皆来たる
冬晴れや遠い同志の「達者です」
冬晴やこっそり読むよ美文字本
青き空白一直線の冬日和
そのの跡円を描いて汽車ぽっぽ
冬の晴一位の枝をかがやかす
ドラ焼きを白湯でいたたく冬日和
冬の晴句を拾ひつつ歩一歩
冬うららバードテーブルせめぎ合い

保科なほ
徳光吐苦
杉山りつ
山口佐知子
横田則子
若田久
高瀬潤
石澤清宏
澤田久美子
松山蓉子
三島智
若田郁
本田咲
佐々木りえ
山内みゆ
長谷川きみゑ
小林ろば
高橋公花
杉山ひろのり

